



お兄ちゃんは、貞操帯奴隷の

～射精管理でお兄ちゃんを独占しよう!～

←これが大事

同人サークル  
僕マソ

プロローグ

お兄ちゃんが好きです。  
大好きです。

でもママが意地悪して高校はお兄ちゃんと同じ学校に通わせてくれませんでした。  
しかも、お兄ちゃんは共学。

ありえません。

こんなこと絶対に許されません。

ママだって、あたしがいかにお兄ちゃんを愛しているか知っているはずなのに…。  
不安で不安で。

あたし、どうにかなりそうです。



# 第1章 妹の射精管理術

兄はM気質を持つてはいたが、それは他の人間には内密にしていた。わざわざ言う必要のないことだし、そうであったとしても別に迷惑をかけることはないからだ。

されど、他の人とそういう行為を試してみたいと思ったことも事実。その時思いついたのが妹だった。

妹は要領がよく、それなりに人格者だった。しかも兄を好いている。

兄としては優秀過ぎる妹が疎ましくもあったが、逆にそういう資質を持ち合わせているかのように感じた。

とどのつまり…。

兄はこともあろうか実の妹に告白してしまったのだ。自分はマゾだと。

普通の妹なら兄を軽蔑し、無視するだけだろう。しかしこの妹は違った。

兄を軽蔑するどころか、兄を慈しんだ。そしてこう言ったのだ。

「じゃあ、今日からお兄ちゃんは射精禁止ね」

— 射精管理 —

兄はそういう行為に、興味があった。確かにこれなら、肉体関係とは言いにくいかもしれない。

実の妹相手にできる数少ないMプレイだろう。挿入するわけではないから、SEXではないという言い訳も、なんとなしに立つ気がする。

しかし、心の何処かで妹が本気だとは思っていなかった。

隠れて射精できるだろうし、表面上だけのプレイだと思っていた。射精できないことが苦しいということを想像はできても、まだ実感を持って意識できなかった。

そして、妹は兄に貞操帯を嵌めた。

兄の股間に不似合いなメタリックシルバーの貞操帯。

兄は、鍵をかけられる直前に「待って」と、そう言いかけたが、言えなかった。兄としての威厳というか、プライドが言わせなかったのだ。

まさかここに来て怖気づいたと思われたくなくて、妹が股間に鍵をかけるのを止められなかったのだ。

妹は、鍵を2種類かけた。

一つは鍵穴のある南京錠タイプ。

一つはナンバーを入力しないと外せないプラスチックキータイプ。

理由は簡単である。

プラスチックキーは壊すことが出来るのだ。

それでは貞操帯の意味が無いと思われるだろう。違う。

あえて壊せるようにしてあるのだ。

そして一度壊したらもう元には戻らない。

どうしようもなく射精したくなって、プラスチックキーを壊したとしても南京錠がある。

南京錠は壊せない。

だから勃起も射精も許されない。

されどプラスチックキーは元には戻らないのだ。

つまりこれは、射精欲に負けて鍵を外そうとしたかの印（しるし）。

この印を外したら最後、兄は妹に

『射精欲に負けた愚かな人間』

という評価をくだされる。

当然、お仕置きとしての射精禁止期間延長もありえるだろう。

あるいは他の罰があるかも知れない。

兄は妹の意図を理解できていた。

妹も兄が理解していることに気がついている。

だから2人はプラスチックキーに関して、言葉を交わす必要がなかった。

しかし一応。念のため。妹は兄にこう言っておいた。

「プラスチックキーがあるから、貞操帯は粗雑に扱わないこと」

「う…うん」

妹の言うとおりに、プラスチックキーは簡単に壊れる。

壊せることを考えて作られた鍵だからだ。

しかし裏を返せば、ちょっとした事故で壊れてしまう。服がひっかかったり、ちよつとしたところにぶついたり…。

そういう場合もお仕置きを加える。

妹はそのことが言いたくて兄に言葉をかけたのだ。

そして兄。

キーホルダーに対してM男が「うん」という言葉は許されない。

しかし、妹はあえて聞き流した。

それはこの先、兄は少しずつ自分に対して敬語で話しかけるようになるであろう事が分かっていたからだ。

今はタメ口がきけても、一ヶ月後はどうなっている？

二ヶ月後は？

半年後は？

一年後は？

遠くない将来。

恐らく兄は、自分に対して土下座をするだろう。

あるいはもつと上。

それ以上のこともするかもしれない。

今はあえてタメ口で返事をさせておくほうが、堕ちてゆく様が楽しめる。

それに本人も敬語を使い始めれば、意識するだろう。

自分が堕ちたのだと…。

だからあえて見逃した。

貞操帯が取れない状態にあると確認すると、妹は兄にのしかかった。

兄はへその上あたりに、座られてうまく抵抗できない。

それどころか妹に後頭部を抱え込まれ、顔を胸に押し付けられる。

「んなっ！」

兄は妹を舐めていたのかもしれない。

妹は一日でも早く。

いや、一秒でも早く自分に兄が「外して下さい。お願いします」と懇願してきて欲しいと強く思っていたのだ。

ならばしなければならぬことは一つ。

兄の性欲を掻き立てることである。

それも他所の女では意味が無い。

自分に対して欲情させなければ意味が無いのだ。

貞操帯の上から、妹はパンツ越しに兄の性器をこすった。

素股というプレイを知っていたので、それをしようとしたのだ。

幾分か本物の風俗とは違ったが、それでも構わなかった。

兄が欲情すればそれで良いのだ。

妹の胸は小さくない。

むしろ大きい。

制服越しに胸の柔らかさが直接顔に伝わってくる。

妹はこのためにあえてブラをつけていないからだ。

兄は妹の自分に対する情の強さと周到さを思い知ることになった。

しかし、同時に女性の胸の柔らかさを知り、空気よりも柔らかく暖かいそれにもっと長く顔を埋めていたいという気持ちに陥ってしまった。

兄の感情は勃起を促してゆく。

一度性を意識すると、止められない。

しかも股間には貞操帯越しに擦る感覚が伝わってくる。

実の妹のパンツの感触と妹の股間の感覚だ。

音さえ鳴っているような気がする。

しゅっしゅっしゅっ、と。

そして兄は……自分の性欲を呪った。

痛む。

ただひたすらに痛む。

勃起をしたくて、したくてしたくてたまらない。

とにかくこの痛みから開放されたいのだ。

加速してゆく妹の、股間。

より深く…、柔らかくも暖かい胸の奥。

呼吸すればするほど、鼻孔に膨れてゆく妹の香り。

兄は、声を上げてしまった。

「むぐうっ！ すみませんっ！

外して下さいっ！

外してっ！」

妹はクスッと笑ってから、兄の耳元で囁く。  
熱い吐息をたっぷり混ぜて、囁くのだ。

「あたしの誕生日まで我慢しようね♥♥」

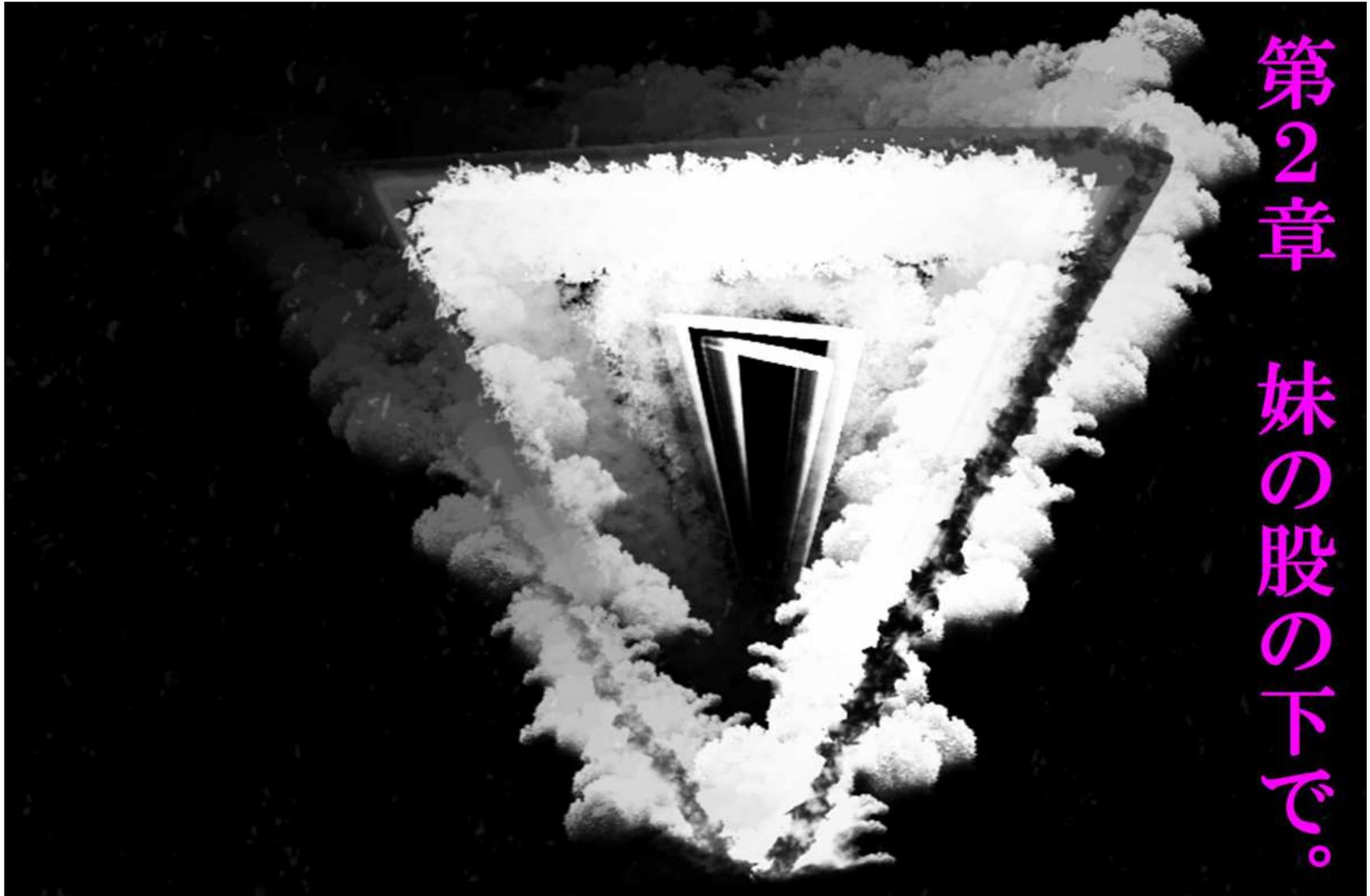
妹の誕生日は、1ヶ月先。

これは基本ラインだ。

何か問題があればどんどんと期間延長されるだろう。

兄は最低でも1ヶ月は射精させてもらえないと思うと、落胆せざるをえなかった。

貞操帯の上で、腰を振る妹の下で。



第2章 妹の股の下で。

この日、両親の帰りは遅かった。

兄は久しぶりに妹の手料理を食べたが、味はよく分からなかった。というのも先ほど自分に貞操帯をかけた妹の肢体が気になってしまうからだ。

締まった尻。

先程まで自分が顔を埋めていた柔らかかすぎる胸。

そして細く美しい腰。

服の上からでも見るだけで意識してしまうあの感触。

もう一度あの香りを嗅ぎたい。

食事中、兄の視線に妹は気がついていたが、あえて気が付かないふりをした。

兄はバレないよう妹の身体を見つめることに夢中。

だが、今は何もしなくて良い。

この後、もっと楽しいことが待っているからだ。

食事よりも女をアピールできる時間。

それは湯上りだ。

兄よりも早く風呂に入り、身体を温めておく。

この湯上りの身体の熱が、男の心にじんわりと…、じんわりと沁みるのだ。

そのことを妹は本能的に知っていた。

だから兄よりも早く風呂に入り、まだ滴る身体をタオルで巻いて兄の部屋に向かう。

兄は、ベッドに横になって呆けていた。

オナニーでもしようかと心に浮かんですぐに、

「ああ、今は無理なんだ」

と少しだけ寂しい気持ちになりながら、考えを打ち消す。

「食べてすぐに横になると、逆流性胃炎になるよ」

兄は、妹の突然の訪問を全く予期していなかった。

ドアが開くと、妹がそこにいる。

まだ髪は濡れている。

全身を包む水の雫は、お湯ではなく汗だろう。

湯気がまだうっすらと浮いている。

そしてそのまま、妹はドアを閉めた。

兄は絶句したまま動けない。

まさかまさか。

妹がここに来た理由がわからない。

「お兄ちゃん。マゾなんでしょう？  
顔に乗ってあげる」

そう言いながら、兄が起き上がる前に妹は兄の顔に腰を下ろした。

腰…。

腰と言うよりも、股間。

股間と言うよりも女性器、マ○コだ。

そこが直接顔にあたるように上手く背を反らしてから、腰を下ろす。

兄にとつてこれが生まれて初めて見る、本物の女性器だった。

一本線がはっきりと見えたと思ったら、その部分が顔に乗る。

思っていたよりもそこは、柔らかかった。

十代特有の柔らかさか、それとも妹だけなのかは兄にはわからない。

ただ、もつとこの部分の肉は硬いのかと思ひ込んでいた。

妹は一本線の部分を兄の眉間あたりに来るよう調整すると、腰を回す。

ぐりぐりと押し付けながらも、決して押し潰したりはしない。

当たっているだけの時もあれば少し離して、あえて空間を作るときもある。

兄を焦らしているだけでなく、匂いを覚えさせているのだ。

こうして覚えさせておけば、必ずオナニーをしたくなる。

いや。

今すぐ、この場で実の妹相手にSEXしたくてたまらないはず。

事実兄は、痛みを覚えながらも、貞操帯をびくんびくんと動かしていた。

鋼鉄の檻の中で男性器が、勃起しようと戦っているのである。

しかし、それが完全に勃つことは無い。

絶対に。

妹は兄に股間を押し付けながら軽く微笑み、そして貞操帯を指で弾いた。

兄は激しく背を反らす。

ただし、それ以上は出来ない。

妹はただ兄の顔に座り腰を回し、性器の香りを嗅がせ、笑うだけである。

微笑みの下では股間の痛みに悶える兄がいる。

しかし兄は、痛みともに少しの喜びを感じていた。

生まれて初めて。

それも10代の女性のマ○コが。ア○ルがまぶたの上にある。  
これが女性だ。  
これが女だ。

そう思ったことが嬉しかった。

そしてそう思うと同時に、その先が見たくなかった。  
つまりSEXしてみたかったわけである。

しかし。

相手は実の妹。

そしてそれ以上に高い壁である貞操帯。

妹は間違えても外さないだろう。

そして貞操帯は勃起を許してくれない。

チ○コが痛む度に、兄は思うのだ。

「僕はSEXをさせてもらえない」

そして自分に言い聞かせるのだ。

興奮してはいけない。

勃起してはいけない。

欲情してはいけない。

妹の挑発に乗ることは痛みを与えられることと同義だ。

冷静になれ。

冷静に。

しかし。

冷静を装えば装うほど、興奮の熱がくすぶって熱くなる。

そういうスパイラルに陥った兄を優しく微笑んでから、妹は再度股間を押し付けて強く  
回す。

そして兄の感情が爆発する前に、妹は兄の顔から降りた。

特に何も声をかけたりはしない。

妹の中にも寂しい気持ちがあるからだ。

あるいは妹自信も抱いて欲しくなったのかもしれない。

しかし、それでは兄の希望を叶えられない。

だから、妹は黙って部屋を出た。

ドアを閉める時に兄がなにか声をかけようとしたが、無視した。

なぜならその言葉を聞いたなら、その通りにしてしまいそうな自分がいたから。

結果として兄は、妹の目論見通り一晩中ただひたすらに悶々としていた。何も出来ないことは分かっている。

妹はもう寝静まっているし、両親は晩酌を始めた。

こんな感情を抱えたまま今部屋から出て行ったら、両親はこれ以上無く怪しむだろう。

この感情を表情に出さぬよう演技し切ることなど自分には出来ない、兄は知っているのだ。

自分自身が怪しまれたくない以上に、妹を巻き込みたくないから寝たふりをして部屋に閉じこもっていた。

しかしどうにも射精したい。

せめて勃起だけでも許してほしい。

兄の心の中で叫んだ懇願に対する答えは、無言である。

誰も何も答えを返さない。

ただただ、時間とともにどうしようもない感情が兄の心のなかに押し込まれてゆく。

気がつくとも兄は、涙を浮かべていた。

そして、たった一日で解錠を申し出ることを恥と思いつながらも、明日の朝妹に頼んでみようと思った。

「どうかお願いします。貞操帯の鍵を外して下さい」

土下座しても良い。

股をくぐって、3回回ってワンと鳴いても良い。

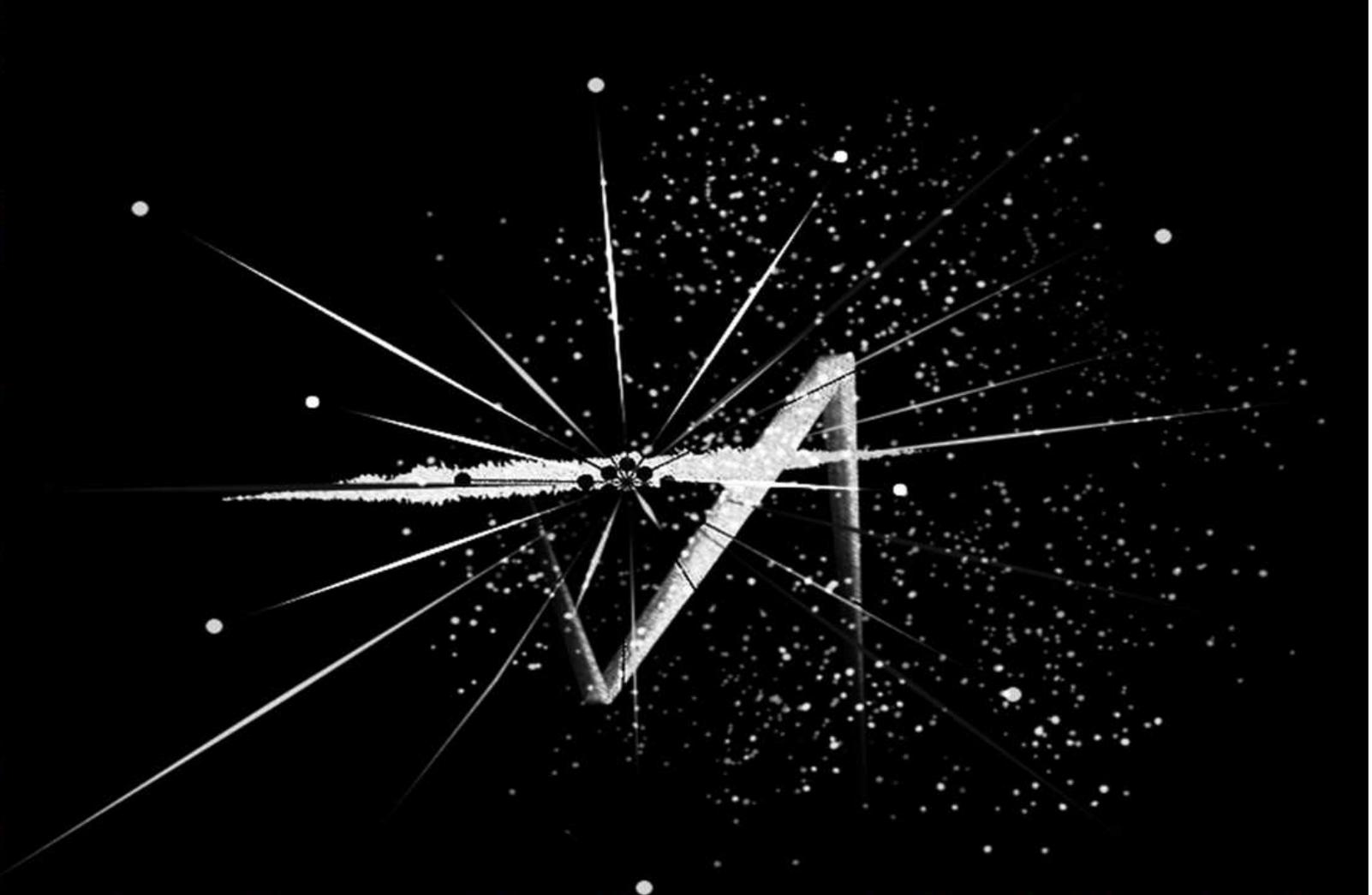
だから外してほしい。

どうしても外してほしい。

兄は、懇願を決意した。



第3章  
オネダリの罰



～外して欲しいなんていうお兄ちゃんにはお仕置きが必要です～

兄は自分がいつ眠ったのか記憶が無い。  
洗顔時妙に、肌ツヤが良い自分がある事に気がついた。  
今朝の兄はその程度のことしか、変わったところはない。  
気分はモヤモヤとしてはいるが・・・。

逆に妹の方は、ご機嫌だった。  
まるでこの世の春のようである。

兄が自分以外の誰ともSEXできなくなったことが嬉しいだけでなく、オナニーにふけることもなくなったことが幸せなのだ。

これで自分だけがその視線を独占できる。  
そして兄は自分だけを見つめ、尽くし、愛するだろう。

妹は満面の笑みで、学校に向かう。

一方、兄は今朝の内に妹に懇願できなかったことに落胆しながら、学校に向かった。

妹が学校から帰ると、すでに兄は家にいた。

両親は今日も遅いらしい。

兄は、自らのM気質を告白した時と同じように、妹に話しを切り出した。

「あの…貞操帯…：…なんだけど…：…」

「ん〜？」

「その…：…外して…：…」

兄は、妹の顔が微笑みから怒りの表情に変わるのをはつきりと見た。  
体が震える。

妹に怯えたことなど只の一度もなかった。  
が、今回だけは違う。

明確な怒りを妹が持っていることが。

そして怯えている自分のはつきりと分かる。

怒りが収まらないままの妹はこう切り返した。

「…：…お仕置きかなあ」

妹の声に、兄は足の裏から耳元の筋まで身体中の筋肉が硬直してゆくのが自分でも分かった。

そして、硬直とともに呼吸が止まってしまふ。  
恐ろしかった。

ただひたすらに恐ろしかった。  
瞳を閉じて忘れてしまったかった。

無論、事實は無くならない。

妹が激怒しているという事實は…。

そして妹の追求が始まる。

「お兄ちゃん。」

もう外して欲しいとか思ってるの？」

「あ、いや…その…」

「ダメじゃない。」

まだ24時間も経ってないよ？」

「……………」

「そうだね。」

やっぱり、お兄ちゃんにはお仕置が必要かな」

「……………」

「男なら根性見せてよ」

「……………」

兄は何も言い返せなかった。

ただ、うつむいて黙っているしかなかった。

妹の言葉が正しいか否かの問題ではなく、貞操帯を外すことが出来るのが唯一妹だけだからだ。

貞操帯を解錠できる者、つまりキーホルダーは絶対なのだ。

妹は、笑っていた。

怒りの感情を押し殺して、演技の笑顔を浮かべている。

それが兄には怖かった。

兄は理解していないが、妹としては兄のオナニーが、そして言い寄ってきているであろう兄のクラスメイトの女子たち全てが邪魔なのだ。  
そして、その全てを排除できるのが貞操帯である。  
兄から貞操帯を外すことなどもってのほか。  
絶対にありえない行為そのものなのだ。

兄に…、判決が下る。

妹が下した罰は兄の予想とは異なっていた。  
兄としては、貞操帯を外す期間を延長されると思い込んでいたのだが実際は、違った。  
妹は、兄に夕食を作るよう命令したのだ。  
それも妹の指定する衣装で…。

妹の指定した衣装。

それは、裸エプロンだった。

兄は、それを着る他になかった。  
着て、媚び、妹の機嫌を良くしておかなければさらなるお仕置きが追加されてもおかしくないからだ。  
むしろ裸エプロンぐらいで済んだことを、感謝したほうがいいかもしれない。  
何よりも怖いあのセリフがないのだ。

「貞操帯、外すの延長ね」

兄は全裸に貞操帯のみという格好で、キッチンに立つ。  
食事などほとんど作ったことがない。  
精々、卵焼き程度しか出来ないだろう。  
その兄に妹は、『ピラフ』を注文した。

「ピラフっていつでもチャーハンと間違えないでね。  
チャーハンだったら許さないから」

ピラフは炒めるチャーハンと違い、その作り方はむしろ炊き込みご飯に近い。  
バターで炒めた肉や野菜を米と一緒に炊いて作るのだ。  
兄はピラフのレシピを知らない。

しかし妹は何も言わずにこっちを見て、黙っている。  
とてもネットで調べるとか、そんな雰囲気ではなかった。  
兄は仕方なしに、想像でピラフを作る。  
妹の想像どおり、出来上がったものはチャーハンそのもの。  
どこからどう見ても、完全にチャーハンだった。

妹はソファに座り、兄を床に直接正座させた。

「だからさあ。お兄ちゃん？

あたしは、ピラフをお願いしたの。

これはチャーハンでしょう？」

「……はい」

「なんなの？

嫌がらせ？」

「………違います」

「違うないでしょう？」

「………」

「はい。お仕置き追加」

妹の言葉に兄は下唇を噛んで、ふさぎ込んだ。

そして蚊の鳴くような声を絞り出す。

「お…お仕置きは……」

「ダメよ」

「………そんな」

兄は背を丸め、小さくなってゆく。

そんな兄を見ながら妹は、股間を震わせた。

あの兄が。  
大好きでたまらない兄が。  
自分のいじわるで震えている。  
怯えている。  
チャーハンもピラフも大して変わりほしくない。  
少なくともあたしにとっては似たようなものだ。  
それなのに。  
それなのに兄は、自分の機嫌を撮りそこねたことに怯えている。  
そして、たった一言。  
「貞操帯外すの先延ばしね」  
そう言われるのを心から、恐れている。

妹は『自分は甘いなあ。でも大好きなお兄ちゃんだし♥』と自分に心の中で言い訳をしてから、口を開いた。

「最低だね」

「……………すみません」

「あんなに注意したでしょう？  
チャーハンを出すなって」

「……………はい」

「お仕置きは仕方ないよね？」

「…………………………」

少しの沈黙をしっかりと楽しんでから、妹は口を開いた。

「机に手をついて」

それは母が、兄や妹にお仕置きをする時の言葉と同じだった。  
両手を机につかせ、深く頭を下げさせ…そして尻を突き出させる。  
突き出した尻には、母の容赦無い手の平が叩きつけられる。

要するにスパンキング。  
尻叩きのお仕置きだ。

これは一見軽い罰に思えた。  
確かに肉体的には、貞操帯延長の罰よりも重くない。  
されど……

兄にとって精神的な負担は想像以上である。  
実の妹に。

それも貞操帯で逆らえなくされた状態で。  
家事をさせられて。

挙句の果てに、家事の出来が悪いと尻を叩かれるのだ。  
実の母に叩かれるのと同じように。

兄は少しの躊躇の後言われた通り机に手をつけて、尻を突き出した。

「ふっ。」

お兄ちゃん。

ア〇ルのシワ少ないね。

…子供みたい」

妹は兄の尻を左右に開くと、しっかりア〇ルを観察してから嘲笑う。  
そして、笑顔のまま言葉を続けた。

「しかも綺麗だし……」

兄は困惑どころか、身動きさえ取れなくなった。  
当然だ。

実の妹にア〇ルをじっくりねっとり観察されて、しかも解説までされている。  
そして、妹は兄のア〇ルにふうっと強めに息を吹きかけた。

兄は声を漏らさぬよう耐えたが、ア〇ルはきゅゅんと萎んでしまう。

「あはははっ！」

「……………」

兄の沈黙の少し後、妹は右手を振り上げた。



それが完成している感覚に、妹は股間を塗らした。  
そして、二度目の尻叩き。

パーンっ!!!!!!

今度は左の尻肉。

妹は精一杯、力の限り手を強く叩きつけた。  
あるいは、兄の尻よりも妹の手の方がダメージは大きかったのかもしれない。  
しかし加減はしなかった。  
兄に対する感情を手に込め、兄の体と心にそれを染みこませる為に力の限り強く叩く。  
それは兄の体を熱くさせ、痛痒さとともに兄を悶えさせる。

「に、二回目。」

あ、あ、ありがとうございます」

「はい。」

「お兄ちゃん。すこしお尻が下がってきてるよ。」

「お尻をもっと高く上げて。」

「反省の色が足りないかな？」

妹の声に兄は強く目をつぶって、心の中に芽生え始めた己の卑小さを認める感情を押し殺した。

そして、せめて兄らしく振舞おうと精一杯尻を高く上げ、

「すみません」

とだけ、返事をした。

しかし。

しかし、妹はこれが不満だった。

なぜ兄は素直に認めないのだ。

「痛くて、痛くてたまらないです。どうか許してください。以後気をつけます。どうかお願います。許してください」と。  
と。

もう体の中はすっかり蕩けて熱くなり、認めようとしているはずなのに。

妹こそ絶対者であり、『兄がマゾであることを許してくれる唯一の存在』であることを本能が認めようとしているはずなのに。

それなのに、まだ兄ぶろうとする。

これが気に入らなかった。

だから、連続して。かつ、左右の尻肉を叩き続けることにした。

明日、いや一週間以上手が痺れて物が持てなくても構わない。

パーンっ！！！！

パーンっ！！！！

パーンっ！！！！

パーンっ！！！！

パーンっ！！！！

合計何回叩いただろう。

妹は息が上がリ、兄の尻を叩けなくなって小休止した。

兄は、すっかり膝から力が抜け、尻を突き出せなくなっている。

その姿は無様そのもの。

そして命令された『お尻叩きのお礼』も言えないでいる。

妹は小休止の間にと、携帯を取り出して中々立てないでいる無様な兄を写メにとった。そしてすぐさま待ち受けにする。

一方、立てないままの兄は呼吸をあえて激しく、早くしていた。

勃起しそうなのである。

勃起しそうな自分を必死で、ごまかしているのだ。

体の奥が熱い。

そして心が、むず痒い。

本能的に、理解しているのだ。

これは射精する前準備。

前戯だと。

そんな今にも勃起しそうな兄の股間を妹は後ろから股の下に手を伸ばして鷲つかみにし、上に引いた。

兄を立てさせるためである。

そして尻を突き出させるためである。

まだか？

まだ兄は勃起しないのか？

自分になぜ懇願しない？

「お願いします。貞操帯を外してくださいっ！」  
と。

たった一言。

その一言が言えたら、笑って貞操帯を外すのを延期する。

そこまでがお仕置きのセット。

一連の流れのはずであるはずなのに。

そこで妹は兄の尻を右、左ともう一度ずつ叩いた。

兄はもはや虫の息で、お礼を口にする。

回数は合っているかなど兄も妹も分からない。

多分、間違っているのだろう。

兄は足の指がもぞもぞとむず痒くなった。

手の指でもある。

そして呼吸はどんどんと浅く、速くなる。

妹は、ふと思いついた。

「そういえばさ。

パパが浮気した時、ママがお尻叩きしたのお兄ちゃんも見たよね？」

それは兄妹の父親が浮気した時に（これはまったくの誤解で、一方的に相手の女が言い寄っただけであった）、母親は夫である父親の股間に貞操帯を嵌め、毎晩の尻叩きを強制した。

その際のメに必ず、真っ赤に腫れ上がった尻を年頃の息子娘に晒したまま、母親は父親の尻を指で撫でながら貞操帯の上から手コキをして、父親を悶絶させるというお仕置きを行っていた。

これが効くのである。

家族に見られて恥ずかしいということもある。

もう二度と息子娘を強く叱ることなど出来なくなるからである。

しかし、それ以上に貞操帯が効く。

勃起しそうになる。

認めなければならない。  
尻を叩かれて、心が火照ったことを。  
認めなければならない。  
勃起しそうな自分を。  
そして、その上で懇願するしかない。  
「どうか許して欲しい」  
と。

父親は無様に母親の足にしがみついて、また同時に貞操帯を抑えて、泣きながら懇願していた。

その光景に兄妹は息を飲んだものである。  
妹はそれを兄に行うと宣言した。  
ただし、両親は遅くまで戻らない。  
だから家族に見せるのは勘弁してやる。  
変わりに反省できたら妹のア〇ルにキスをしろ。  
そう命じた。

兄は沈黙したまま、心の中だけで「嫌だ」と念じた。  
無論、心の声は届かない。  
妹は兄の表情でその感情を読んでいたが、あえて無視した。  
泣きながら自分に許しを請う兄がどうしても見たいからである。

そして、兄の突き出された尻に妹の細く白い指が当てられ、赤い痕を撫でてゆく。  
下から上に向けて、つつつつ、と。  
今度は上から下に向けて、つつつつ。  
兄が何度かビクツと体を跳ねさせると、妹は黙って兄の尻をパンっ！と叩いた。

ーおとなしくしなさいー

そういうことなのだろう。  
そして同時に兄の股の下から手を伸ばして貞操帯を掴む。  
掴んだ手は、牛の乳搾りの要領で（妹は手コキで男を逝かせたことが無いので、やり方が良く分からなかったのだ）、手を擦らせる。  
そのぎこちなさと、リズム感。  
時折、耳に吹きかけられる熱い吐息。



兄は、勃起した。  
正確には半勃起といったところか。  
貞操帯の中いっぱいチ○コが膨れ上がる。  
痛みに声を上げても、止まらぬ手コキ。  
そして尻撫で。  
熱い吐息。

兄は膝から崩れ落ちた。  
全身に力が入らない。  
とても立っていらなかった。

結果として、妹の手から逃れることが出来たが、勃起はまだ収まらない。  
否。

床の冷たさに触れたことで余計に、体の熱を意識してしまった。  
そして…。

兄は父親同様に、妹の足にしがみつきの。  
泣いた。  
泣いて、懇願した。

「お願いです。  
許してください、許してください、許してください！  
すみませんでした！  
貞操帯を外してください。  
お願いします。  
もう十分ですからっ！！！！」

上目遣いの兄の瞳にあふれる涙。  
妹は冷徹な感情だけを顔に出して、言った。

「ふうくん？  
反省したの？  
じゃあ、あたしのア○ルにキスして」

兄は、必死で妹の股をくぐり、（こうすることが妹のア○ルに近づく一番の近道だったからである）スカートの中に頭を突っ込み、妹のア○ルがあるであろう部分にキスをした。

何度も。

何度もキスをした。

そして、そのまま妹の股の下で土下座。

妹は上から見下ろしてから、（兄には気づかれなかったが、口元は笑顔で歪み、よだれが漏れていた）兄の頭の上に尻を下ろして、宣言をする。

「お兄ちゃん♥

ア〇ルへのキスに愛情が足りない気がするなあ。

これだと、また貞操帯を外して欲しいとか言いそうだし…。

とりあえず貞操帯外すのは延長ね。

文句ある？」

兄は妹の尻の下で声をあげて泣いた。

泣きながら、涙混じりの声で答える。

「……あ、ありません。

すみませんでした」

と。

※体験版はここまでです。

続きは、販売版でお楽しみ下さい。